

Exhibition

# RAIDING PROJECT: Crossover architecture

今をときめく日本人建築家たちが  
オーストリアの小さな村のために提案した、  
マイクロ建築

世界中から建築家が集まる第24回世界建築家会議 東京会議 (UIA 2011) に向けて  
「RAIDING PROJECT: Crossover architecture」展が開催された。

会場はBMW Group Studio。コンパクトで超モダンなこの会場から発信される、9人の日本人建築家によるマイクロ建築の提案だ。  
この展覧会のために原広司が特別にデザインしたMINI Crossoverのためのモバイル・ガレージ「Cap & Camp」も初公開された。



人口900人のライディング村はウィーンから80km、ハンガリー国境近くに位置する。ブラウフレンキッシュというすばらしいブドウで知られ、昔ながらの農家とワイン農園の間にある。

人口900人の小さな村ライディングは、ウィーンから80kmの距離に位置する。フランス・リスト生誕の地であり、長い間、高度な文化と前衛の伝統があった。2005年から2006年にかけて、座席数600ほどのモダンなコンサート・ホールが建設されている。そして今、ライディング・プロジェクトの一環として、10人の日本を代表する建築家たちが、小型で、未来的で、多機能的な建築を提案中であり、これらの建築は、多くの音楽家や芸術家たちが今後、この村に滞在して芸術活動を展開する拠点となる予定だ。ライディング・プロジェクトには原広司、伊東豊雄、藤森照信、隈研吾、青木淳、SANNA(妹島和世+西沢立衛)、山下保博、クライン

ダイサム アーキテクト、手塚貴晴+由比、藤本壮介の10人の建築家が参加。彼らの最初の提案は2010年9月にウィーンの建築センターで開かれた展覧会で紹介された(詳しくはTHE MINI INTERNATIONAL #34)。

2011年はライディング・プロジェクトにおいて良き年であり、リスト生誕200年祭が祝われる。10月22日が、この偉大な作曲家・超絶技巧ピアニストの200回目の誕生日なのだ。

かつて例のないオーストリアと日本のこの交流は、ライター兼写真家のローランド・ハーゲンバークの発案によるものである。彼は長年、日本で活動し、日本の建築家たちと親交を築きあげてき

た。言うまでもなく、日本の建築界は国際的にも最前線に位置している。「ライディング村の10棟の建物はアーティスト・イン・レジデンスに使われますが、同時に世界中の建築愛好家たちにも開かれています」とハーゲンバークは語る。

25㎡の敷地で2階建て以下、これが日本の建築家たちにハーゲンバークが課したルールだった。彼らへの課題は、この狭い面積の中に、バスルーム、寝室、オフィス、キッチンが備わった完璧な居住空間を納めること。この課題は、効率的な空間利用と居心地のよい生活の変数を伴う、難しい方程式を解くことでもあり、建築家たちはそれぞれの方法で解決策を見出した。「建物のス ▶▶



手前より「サウンド・キューブ」(伊東豊雄)、「アンバー・ロード・ハウス」(山下保博)、「移動巡回型公共サービス」(大野秀敏)、奥は「ブックハウス」(青木淳)。



上は「アンバー・ロード・ハウス」を語る山下保博、下は向かって左より原広司、ローランドハーゲンバーク、リヒャルト・ウォシツ、藤森照信。



SANNA(妹島和世+西沢立衛)は外で昼寝をする時の気持ちのいい空間をイメージした。左は西沢立衛(左)と妹島和世(右)。右はSANAAのスケッチ「おおきなかやのねるところ」。この案は今回の展覧会のために新たに作成された。

「タイルは、伝統的な田園環境から際立って見える」とライディング村のリスト・コンサート・ホールの建設に携わる技術者のリヒャルト・ウォシツは語る。彼は日本人建築家の建築設計案がオーストリアの建築基準法や都市計画法と整合するよう調整役を務めている。

一連の建築の中には、まったく新しい技術や建築素材を用いた実験的なものもある。たとえば、隈研吾は光の波を導き入れる仕組みが組み込まれた透明なコンクリート壁のある家屋を設計している。超高層ビルやスポーツスタジアム、日本の月の観測施設などを設計してきた原広司は、その作品「ライディング・キューブ」において、革新的な空気循環システムの実験を行っている。一方で、ツリーハウスを好む藤森照信はブルゲンラント地方の自然景観からインスピレーションを得ている。彼の設計した建物に

取り込まれたのは10mの高さのオークの枝で、あたかも建物から外に伸びだしているように見える。そして、枝の先には大きな鳥の巣がある。これは、例年、多くのコウノトリが南アフリカまでの渡りの途中、ライディング村に立ち寄るからだ。藤森は、自らの「鶴庵」について次のように語る。「ある意味で、私たち建築家も渡り鳥みたいなものなのです。さらにいえば、この建物は「焼き杉」という、表面を炭状に焼いたヒマラヤスギで覆われることになる。火で処理され炭化した木材は耐火性が高まり、強度も増す。日本では何百年も前から、農夫や山林管理者たちは木材をこのようにして扱ってきた。つまり「焼き杉」で建物を守ってきたのだ。板の深みのある黒色が、建物に時を超えたミニマリズムの魅力を与える。藤森の作品が最初に完成しつつあり、原の「ライディング・キューブ」がそれに続く。

### 東京のRAIDING PROJECT 展

今回の東京展ではライディング・プロジェクトの10人の参加建築家のうち8人が出展した。既に紹介した藤森照信の「鶴庵」、原広司の「ライディング・キューブ」に続いて、伊東豊雄は「サウンド・キューブ」、隈研吾は「Casa Umbrella」と題する半透明の新素材で作られたシェルター。SANNAは半透明の布状の屋根で覆ったシェルター「おおきなかやのねるところ」、山下保博はライディングの石や木片を固めた透明なキューブ「アンバー・ロード・ハウス」、そしてトラーラーハウス「モバイル・すまいる」も特別出品している。青木淳は「ブックハウス」、手塚貴晴+由比は「ピアノハウス」を提案した。

### 大野秀敏の“移動巡回型公共サービス”

今回の展覧会では新たに大野秀敏が加わった。これまで縮小社



ツリーハウスを好む藤森照信はブルゲンラント地方の自然景観からインスピレーションを得た。左はライディング滞在中の藤森照信、右は「鶴庵」の模型。



大野秀敏の“移動巡回型公共サービス”。公共サービスをモジュール化し、車で運び、目的に応じて、モジュールを建物に接続、連結する。会場の模型ではMINI Crossoverのミニチュアが牽引していた。

会に向けてさまざまな提案をしてきた大野は作品のコンセプトについて次のように語る。

「現代社会においては、郵便、保健、医療、福祉、教育など多くの公共サービスが、人々の生活を支えています。その基礎は税収入です。残念ながら、縮小社会では税収入は増加せず、むしろ減少する可能性が高いのです。それを地域共同体の支え合いで補うことが重要な選択肢のひとつですが、もうひとつの選択肢としては、サービスの形態を考えることです。高度成長を続けて来た日本では、公共サービスは、公共建築と分ち難く結びつけられてきたため、コストが高くなり、都市が縮小するとサービスの維持が難しくなる事態が発生します。

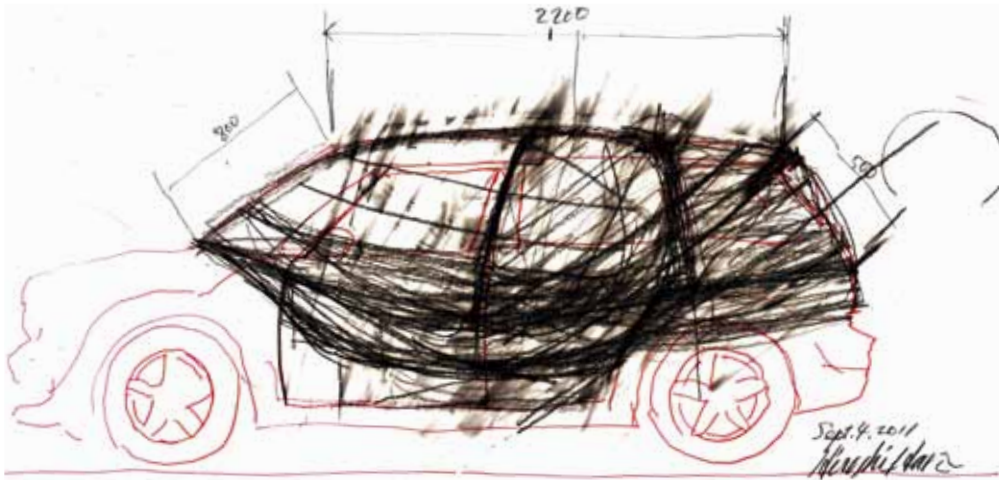
ここに提案するのは、公共サービスをモジュール化し、車で運び、目的に応じて、モジュールを建物に接続、連結するシステムです。

複数の地域でこのシステムを共有すれば、公共サービスのコストは低減し、地域の生活の質を決定的に落とすことを防ぐことが可能になります。つまり従来のシステムは、[建築=空間+サービスコンテンツ]で、私の今回提案するシステムは、[建築=空間]+[自動車=サービスコンテンツ]です」

#### 原広司のガレージ“キャップ&キャンブ”

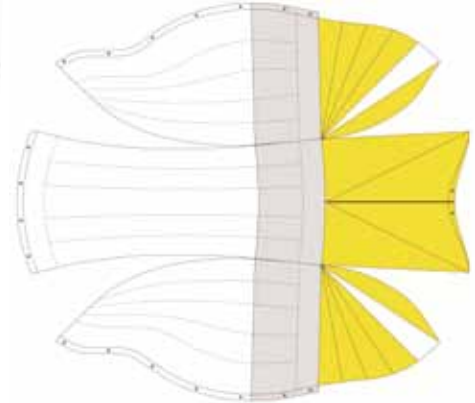
展示会の特別展示は、原広司によるMINIの新型4ドア「MINI Crossover」のための、持ち運び可能なガレージだ。“キャップ&キャンブ”と呼ばれるこのガレージの片側にはMINI Crossoverを収容、もう片側にはドライバーや同乗者が宿泊できる。ツインタイプにデザインされたこのガレージの名称は設計概念を象徴しており、ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーの思想にちなん

だ言葉遊びだ。ハイデッガーの著書『存在と時間』は、時間の流動性と存在の意味を分析した作品。原広司の構想によれば、“キャップ&キャンブ”のカラーとパターンはカスタマイズ可能で、都会とアウトドアを行き来する機動性を楽しむ、MINI Crossoverのドライバーのさまざまな好みに合わせられるようになっている。「展示会では完成した製品は展示しません。ディテール、テクニク、快適さを洗練させるためにはもっと時間が必要です」と原は語る。“キャップ&キャンブ”の入口には、19世紀の詩人で哲学者のヘンリー・ディヴィッド・ソローの書物『ウォールデン』から引用したテキスト「自然の中の静かな生活」を掲げている。原は世界中のMINIのドライバーのユニークなテイストを反映するために、“キャップ&キャンブ”のための100通りのプロトタイプ・モデルを作成した。



原のドローイング。展覧会のために作られた“キャップ&キャンプ”のスタディ。

原広司は持ち運び可能な MINI Crossover ツインタイプ・ガレージのために素材と形態の実験をした。“キャップ”はMINIのため、“キャンプ”はドライバーのため。



原広司はいつも深夜まで働く。彼のスタジオで。



MINI Crossoverのためのツインタイプのモバイル・ガレージ “Cap & Camp”

背景に流れるローランド・ハーゲンバークが制作した映像は、ライディングの魅力が余すところなく伝え、9人の建築家のライディングに寄せるメッセージがその間に折り込まれている。9月24日のレセプション会場では原広司、藤森照信に加え、ウィーンから来日した、リハルト・ウオシツ博士のトークも行われた。

ウィーン建築センター館長のディートマー・シュタイナーは、ライディング・プロジェクトはトレンドの一部をなしていると語る。彼の説明によれば、「近年、新しい形態の観光客受け入れ態勢が醸成されつつあります。巨大ホテルや地中海クラブ的な建築は流行おくれです。アイルランドでも、ノルウェーでも、そしてライディング村でも、そういった建築の代わりに、風景の中に細やかに包み込まれ、高度な建築のスタンダードを見せるような、小規模で独立

した作品が現れています。これらの建築は、来訪者にとっても特殊な空間体験を提供します。ライディング村の日本人建築家の建築群も、またこういった思想を体現しているのです」

第24回世界建築家会議 東京会議 (UIA2011) に向けて開催されたこの展覧会の会場は東京駅八重洲南口近くにあるBMW Group Studio。コンパクトで超モダンなこの会場から発信された、9人の日本人建築家によるマイクロ建築の提案は、世界中から来日した建築家たちの注目を集めていた。

By THE MINI INTERNATIONAL  
photos & sketches: SANNA (p.78 下右),  
Hidetoshi Ohno (p.79 下左, 下右),  
Hiroshi Hara (p.80 上左, 上右) and Roland Hagenberg

.....  
**展覧会データ**

RAIDING PROJECT: Crossover architecture

キュレーター: ローランド・ハーゲンバーク

(協力: 森田伸子、阪部恵子)

参加建築家:

原広司、伊東豊雄、藤森照信、大野秀敏、隈研吾、青木淳、SANAA

(妹島和世+西沢立衛)、山下保博、手塚貴晴+由比

特別展示: MINI Crossover のためのガレージ “Cap & Camp”

(設計: 原広司、アシスタント: 原倫太郎)

会期: 2011年9月23日(金)-10月10日(日) 無休

会場: BMW Group Studio

.....